

三輪

世阿弥作

季は	地は	後	前
秋	大和	ワキ シテ 三輪明神	ワキ シテ 玄賓僧都 里女
		前に同じ	

「是は和州三輪の山陰に住居する。玄賓と申す沙門にて候。さても此程何くともなく女性一人。毎日檜闕伽の水を汲みて來り候。今日も來りて候はゞ。如何なる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候。

シテ次第
「三輪の山本道もなし。く。檜原の奥を尋ねん。

サシ
「實にや老少不定とて。世の中々に身は残り。幾春秋をか送りけん。あさましや成す事なくて徒に。憂き年月を三輪の里に。住居する女にて候。

詞
「又此山陰に玄賓僧都とて。貴き人の御入り候ふ程に。いつも檜闕伽の水を汲みて参らせ候。今日もまた参らばやと思ひ候。

ワキ
「山頭には夜孤輪の月を戴き。洞口には朝一片の雲を吐く。山田もるそほづの身こそ悲しけれ。秋はてぬれば訪ふ人もなし。

シテ詞
「如何に此庵室の内へ案内申し候はん。

ワキ詞
「案内申さんとはいつも来れる人か。

シテ

「山影門に入つて推せども出でず。

ワキ

「月光地に敷いて掃へども又生ず。

二人

「鳥声とこしなへにして。老生と静かなる山居。

下歌地

「柴の編戸を押し開き。かくしも尋ね切檻。罪を助

けてたび給へ。

上歌

「秋寒き窓の内。く。軒の松風うちしぐれ。木の葉かきしく庭の面。門は葎や閉ぢつらん。下樋の水音も。苔に聞えて静かなる。此山住ぞ淋しき。

シテ詞
「如何に上人に申すべき事の候。秋も夜寒になり候へば。御衣を一重賜はり候へ。

ワキ詞

「易き間の事此衣を参らせ候ふべし。

シテ

「あら有難や候。さらば御暇申し候はん。

ワキ詞

「暫く。さてく御身は何くに住む人ぞ。

シテ

「妾が住家は三輪の里。山本近き所なり。其上我菴は。三輪の山本恋しくはとはよみたれども。何しに我をば訪ひ給ふべき。なほも不審に思し召さば。

とぶらひきませ。

「杉立てる門をしるしにて。尋ね給へと言ひ捨てゝ。

かき消す如くに失せにけり。 (中入)

ワキ歌

「此草菴を立ち出でゝ。 く。 行けば程なく三輪の里。 近きあたりか山陰の。 松はしるしもなかりけり。 杉村ばかり立つなる。 神垣は何くなるらん。

く。

ワキ

「不思議やな是なる杉の二本を見れば。 有りつる女

人に与へつる衣の懸かりたるぞや。 寄りて見れば衣の襷に金色の文字すわれり。 読みて見れば歌なり。 三つの輪は清く淨きぞ唐衣。 くると思ふな取ると思はじ。

後ジテ

「千早振る。 神も願ひの有る故に。 人の值遇に逢ふぞうれしき。

ワキ
「不思議やな是なる杉の木陰より。 妙なる御声の聞えさせ給ふぞや。 願はくは末世の衆生の願ひをか

なへ。御姿をまみえおはしませと。念願深き感涙に。墨の衣を濡らすぞや。

シテ「恥かしながら我姿。上人にもみえ申すべし。罪を助けてたび給へ。

ワキ「いや罪科は人間にあり。是は妙なる神道の。

シテ「衆生済度の方便なるを。

ワキ「暫し迷ひの。

シテ「人心や。

地「女姿と三輪の神。く。襷掛帶引きかへて。唯祝子が着すなる。烏帽子狩衣もすその上に掛け。御影あらたに見え給ふ。かたじけなの御事や。

地クリ「夫れ神代の昔物語は。末代の衆生の為め。済度方便の事業。品々以て世の為めなり。

シテサシ「中にも此敷島は。人敬つて神力増す。

地「五濁の塵に交はり。しばし心は足引の。大和の国に年久しき。夫婦の者あり。八千代をこめし玉椿。

変はらぬ色を頼みけるに。

クセ

「されども此人。夜は来れども昼見えず。ある夜の睦言に。御身如何なる故により。かく年月を送る身の。昼をば何と烏羽玉の。夜ならで通ひ給はぬは。いと不審多き事なり。唯同じくはとこしなへに。契りをこむべしと有りしかば。彼人答へ云ふやう。実にも姿は羽束師の。漏りてよそにや知られなん。今より後は通ふまじ。契りも今宵ばかり。」

りなりと。懇に語れば。さすが別れの悲しさに。帰る所を知らんとて。苧環に針をつけ。裳裾に之を閉ぢつけて。跡をひかへて慕ひ行く。

シテ
「まだ青柳の糸長く。」

地
「結ぶや早玉の。おのが力にさゝがにの。糸くり返し行く程に。此山本の神垣や。杉の下枝に留りたり。こはそもそもあさましや。契りし人の姿か。其糸の三わげ残りしより。三輪のしるしの過ぎし世を。

語るに付けて恥かしや。

ロンギ地
「実に有難き御相好。聞くにつけても法の道。猶し

も頼む心かな。

シテ
「とても神代の物語。委しくいざや顕はし。彼上人
を慰めん。

地
「先は岩戸の其初め。隠れし神を出ださんとて。

八百万の神遊び。是ぞ神楽の始めなる。

シテ
「ちはやぶる。(神樂)

ワカ
「天の岩戸を引き立てゝ。

地
「神は跡なく入り給へば。常闇の世と早なりぬ。

シテ
「八百万の神たち。岩戸の前にて之を歎き。神楽を
奏して舞ひ給へば。

地
「天照大神其時に。岩戸を少し開き給へば。又常闇
の雲晴れて。日月光り輝けば。人の面白々と見ゆ
る。

シテ
「面白やと神の御声の。

地「妙なる始めの物語り。

「思へば伊勢と三輪の神。く。一体分身の御事。
今更何と岩倉や。其閑の戸の夜も明け。かく有難
き夢の告。覚むるや名残なるらん。く。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈 第七輯」大和田建樹著